

## 三浦市立名向小学校

研究テーマ：生き生きと学ぶ子～非認知能力が拓く学び～

### 1 実践の目的

本校では昨年度、児童の思考の過程や学びの姿を丁寧に見取りながら授業改善を行い、主体的に学ぶ力の育成を目指して研究を進めてきた。

素直で前向きに学ぶ姿があるが、粘り強さや柔軟性の低さ、読解力を中心とした学力面の課題も明らかになった。子どもの“学びたい”という内発的な意欲や、困難に向き合い乗り越えようとする力、他者との関わりを通して学びを広げる力など、学びの土台となる非認知能力の育成が必要であると感じた。

そこで今年度は、非認知能力の育成に焦点を当て、子どもがより主体的に学びに向かう姿勢を育てるための授業づくりと環境づくりを行った。学力（認知能力）を木の枝や葉とするなら、根っこや土壌にあたる非認知能力の育成を目指していく。

### 2 実践の内容

#### (1) 授業改善による非認知能力の育成

授業では、子どもが自分の考えをもとに試行錯誤しながら課題に向かう姿を大切にしました。すぐに正解を求めるのではなく、「どう考えたか」「なぜそうするのか」など、学びの過程に重点を置いた授業づくりを進めた。教師は、子どもの学びの様子を丁寧に見取り、その場で言語化して伝えること、授業のテンポを意識して集中の流れをつくることなどを共通の取組とした。これらを意識した授業づくりを通して、児童が自分の考

えに自信をもち、挑戦しようとする姿勢を育てることをねらいとした。

#### (2) 縦割り活動

今年度から、縦割り活動を取り入れた。この活動は「柔軟に他者と関わる力」を育てることをねらいとしている。高学年は、下学年の児童に寄り添って声をかけ、活動をリードする役割を担う中で責任感や思いやりの気持ちを育み、低学年は上級生の姿をお手本にしながら関わりの幅を広げている。異学年同士の交流により、学校全体が安心して関わり合える集団になることを目指している。

#### (3) 全校による表現活動

月の歌を決め、朝会で歌う取組を行った。歌うことを通して、声をそろえる楽しさや、仲間と表現する心地良さを感じられるようにした。心身を開放する活動の継続が、安心して表現できる集団の土台づくりになると考えている。

#### (4) 花まる学習会講師による教職員研修・保護者向け講演会

花まる学習会から講師を招聘し、教職員研修と保護者向けの講演会を開催した。

教職員研修では、花まる学習会で取り組んでいる授業づくりのポイントや、子どもへの声かけのタイミングや内容などの具体的な方法を学んだ。研究授業では教師の発問や子どもの意見の拾い方、子どもの様子

から見取ったこと等を、職員研修で学んだポイントに沿って助言していただいた。

また、保護者向け講演会も開催した。子どもたちの主体性や自己肯定感を育むために、子どもの姿をどう捉えるか、どのような言葉かけをするか等、具体的な例をもとに話していただいた。

### 3 実践の成果と課題

#### 成果

- ・児童の試行錯誤する姿に焦点を当てたことで、教師が授業の組み立てを工夫する意識が高まり、発問や活動の設定を見直す機会が増えた。その結果、児童が主体の時間を確保することができ、学びの深まりが見られた。

- ・課題の出し方、声かけの仕方、授業のテンポなどを意識的に工夫したことで、児童が安心して自分の考えを表現できる学習環境を整えることができた。特に、学びの過程を大切に声かけを意識することで、児童が最後まで粘り強く取り組もうとする姿が増えた。

- ・児童の実態に応じて、授業者が教材や活動内容を柔軟に見直し、児童の姿を中心に据えた授業づくりを行うことができた。授業者自身が挑戦したい教科や、クラスの実態に合わせた単元づくりをすることができた。

- ・全員が授業公開をしたことで、児童理解が深まり、支援の在り方や指導観について共通理解を図ることができた。

- ・朝の会で歌を歌うことで、心身の解放をしてから1日をスタートさせることができた。

- ・縦割り活動では、同学年同士の関わりの中では見られない姿を見ることができ、多面的な児童理解につながった。

- ・花まる学習会講師による教職員研修では、子どもの学習意欲を引き出すための授業の

構成や教材の渡し方など、具体的な方法を学び、共通の取り組みとして実践につなげることができた。

また、保護者向け講演会の実施により、子どもの自己肯定感を育むための子どもの捉え方や大人の在り方について、学校と家庭で共通理解を図ることができた。

#### 課題

- ・非認知能力に着目した取組が広がる一方で、非認知能力の捉えが大きかったことが課題としてあげられた。結果、授業づくりや授業を見る視点が多岐にわたり、研究の焦点がぼやけてしまった。

- ・歌の取組は、取り組み方の意識に差が見られた。学年ごとの発表の場を設けるなど、教師も児童もねらいをもって取り組めるような工夫が必要である。

- ・全員公開授業の成果があった一方で、学校の実態として、自習体制の組みづらさが見られた。1時間の授業を集中して参観できるようにしたい。

### 4 今後の展開

来年度も非認知能力の育成を柱とした取組を継続する。以下のことを整理して次年度の研究を進める。

- ・育成したい非認知能力を明確にする。
- ・教科や活動内容を整理し、焦点化する。教科は、生活科・総合的な学習の時間とする。

- ・縦割り活動や表現活動を計画的に位置づけ、児童が安心して他者と関わり、自己表現できる場を継続的に設定していく。

- ・歌の取組は、ねらいや取り組み方を共通確認していく。